

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 歯 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査**

[P-065]

精神科病院歯科における医療安全対策—6年間の歯科ヒヤリ・ハット事例の分析—

○坪井 千夏<sup>1</sup>、中川 晋輔<sup>2</sup>、東 倫子<sup>3</sup>、小林 直樹<sup>1</sup> (1. 特定医療法人 万成病院、2. 医療法人清心会 中川歯科医院、3. 岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター)

[P-067]

当科における高齢者の智歯抜歯症例の臨床的検討

○高久 勇一朗<sup>1,2</sup>、高橋 光<sup>1</sup>、市ノ澤 将史<sup>1</sup>、片倉 朗<sup>2</sup> (1. 東京都立豊島病院病院歯科口腔外科、2. 東京歯科大学口腔病態外科学講座)

[P-069]

居宅介護支援事業所における口腔・栄養スクリーニング加算の活用状況に関する調査

○本川 佳子<sup>1</sup>、白部 麻樹<sup>1</sup>、五味 達之祐<sup>1</sup>、岩崎 正則<sup>2</sup>、早川 美知<sup>1</sup>、渡邊 裕<sup>2</sup>、平野 浩彦<sup>1</sup> (1. 東京都健康長寿医療センター研究所自立促進と精神保健研究チーム、2. 北海道大学大学院歯学研究院)

[P-071]

「一歩踏み出せる！！歯科訪問診療ガイドブック」作成と今後の課題

○岡田 尚則<sup>1</sup>、和田 智仁<sup>1</sup>、大河 貴久<sup>1</sup>、水野 昭彦<sup>1</sup>、奥野 博喜<sup>1</sup> (1. 京都府歯科医師会)

[P-073]

歯科に関する講義を受講した高齢者のフッ化物配合歯磨剤の使用状況に関する調査

○遠藤 眞美<sup>1</sup>、朝田 和夫<sup>2</sup>、呉 明憲<sup>2</sup>、野本 たかと<sup>1</sup> (1. 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座、2. あさだ歯科口腔クリニック(東京都) )

[P-075]

介護老人保健施設に口腔ケア介入によって生じたスタッフの口腔衛生意識の変化

○西澤 光弘<sup>1,2</sup> (1. 医療法人群栄会田中病院 歯科、2. 医療法人隆仁会 山王歯科)

[P-077]

「【OF-5 準拠】オーラルフレイルチェック」の開発（第1報）

○新家 信行<sup>1</sup>、齊藤 朋愛<sup>1</sup>、畑 陽子<sup>1</sup>、城戸 雅和<sup>1</sup> (1. 福井県坂井地区歯科医師会)

[P-079]

骨修飾薬投薬患者における抜歯後治癒経過の調査

○秀島 樹<sup>1,2</sup>、福島 あかり<sup>1</sup>、磯部 昌幸<sup>1</sup>、有川 風雅<sup>1</sup>、中村 ゆり子<sup>1</sup>、片倉 朗<sup>2</sup>、潮田 高志<sup>1</sup> (1. 東京都立多摩北部医療センター歯科口腔外科、2. 東京歯科大学口腔病態外科学講座)

[P-081]

高齢者に対するオンライン診療、医療MaaSの歯科運用の取り組み—Toba Online Dental Check-up Project on MaaS—（第1報）

○寺本 祐二<sup>1</sup>、小泉 圭吾<sup>2</sup> (1. 寺本歯科医院、2. 神島診療所)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50～13:20 血 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-065] 精神科病院歯科における医療安全対策—6年間の歯科ヒヤリ・ハット事例の分析—**

○坪井 千夏<sup>1</sup>、中川 晋輔<sup>2</sup>、東 倫子<sup>3</sup>、小林 直樹<sup>1</sup> (1. 特定医療法人 万成病院、2. 医療法人清心会 中川歯科医院、3. 岡山大学病院スペシャルニーズ歯科センター)

**【目的】**

近年、歯科領域においても医療事故に関する報告は多くなされるようになっており、事故報告やヒヤリ・ハット報告をもとに再発防止の取り組みが行われている。しかし、精神科病院歯科における報告は少ない。そこで本調査では、精神科病院における歯科診療で発生した事故報告、およびヒヤリ・ハット報告を分析し、精神科患者の課題とリスク要因を明らかにすることで、歯科医療の安全性向上と質的改善に寄与することを目的とした。

**【方法】**

対象は、2019年1月から2024年12月に当院歯科で提出された事故報告書とした。これら報告書を日本医療機能評価機構の歯科ヒヤリ・ハット事例に沿って項目ごとに分類し、その内容を検討することとした。

**【結果と考察】**

事故報告書は1001件であった。月別に報告件数を比較した結果、6月の報告件数が106件と最も多く、10.5%を占めていた。発生時間帯は午前の診療時間帯が45.6%を占めていた。事故レベル1～6の内、事故レベル1の割合が94.5%と大半を占めており、発生場所は歯科診療室が82.0%であった。事故内容としては「その他」が57.6%と最多であり、精神疾患患者に特有の突発的行動に対する安全管理の課題が多く含まれていた。さらに、患者情報管理の不備などのヒューマンエラーも確認された。スタッフ側の発生要因として「確認を怠った」が51.9%を占めており、次いで患者の病状・機能やリスク管理意識の低下が挙げられた。

本調査の結果、医療事故の発生に時期的および環境的要因が関連していることが示唆された。発生月として6月が最も多かった点として、業務量の増加やスタッフの疲労、患者数の季節的変動が影響している可能性がある。また、午前中の事故が多い傾向は、業務開始直後の準備不足や繁忙時間特有の集中力低下が要因と考えられる。一方で、事故内容として「その他」の割合が多かったことは、精神科患者に特有の行動リスクや治療環境の特殊性を反映しており、日本医療機能評価機構の歯科ヒヤリ・ハット事例の分類に沿って項目分けすることの難しさを示している。患者情報の管理不備やヒューマンエラーの存在も改善課題であるが、今回の結果から、今後は、スタッフ教育や業務効率化に加え、精神科患者の行動リスクマネジメントを含めた安全管理体制の確立が不可欠と考えられる。

(COI開示：なし、万成病院倫理審査委員会承認番号：20251-1)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 ⑧ ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-067] 当科における高齢者の智歯抜歯症例の臨床的検討**

○高久 勇一朗<sup>1,2</sup>、高橋 光<sup>1</sup>、市ノ澤 将史<sup>1</sup>、片倉 朗<sup>2</sup> (1. 東京都立豊島病院病院歯科口腔外科、2. 東京歯科大学口腔病態外科学講座)

**【目的】**

日本は平均寿命の著しい伸びとともに高齢者人口が増加し、一般の歯科医院を受診する高齢者の割合も経年的に増加傾向と言われている。歯科疾患も歯周疾患の割合が増加しているが、智歯に起因する炎症性の病態により、高齢者の智歯抜歯の機会も増加している。高齢者に対する歯科治療の多くは精神的、肉体的に負荷がかかるため、高齢者の特性に合わせた配慮が必要になるが、抜歯は、高齢者の全身状態に配慮するだけでなく、抜歯自体の難易度も考慮しなければならない。特に智歯の抜歯は、難易度が高く口腔外科の専門医療機関に依頼されることもあるが、簡単に抜歯出来ないことが多く、安全かつ確実に抜歯を行うために、その抜歯方法に関して十分な検討を要する。そこで今回65歳以上の高齢者における智歯抜歯症例について臨床的検討を行ったので報告をする。

**【方法】**

対象は2022年4月から2024年12月までの2年9か月の間に東京都立病院機構東京都立豊島病院歯科口腔外科において、65歳以上で智歯の抜歯を行なった症例である。検討項目は症例数、性別、年齢、抜歯部位、智歯の状態、抜歯理由、基礎疾患、常用薬、骨吸収抑制薬の使用、抜歯方法、術後合併症とした。

**【結果と考察】**

症例数は88例で、性別は男性50例、女性38例、年齢は65歳から89歳で平均年齢は74歳であった。抜歯部位は下顎がのべ80例、上顎がのべ11例、智歯の状態は骨性埋伏や水平埋伏など埋伏歯が多数を占めた。抜歯理由はう蝕や智歯周囲炎を主に炎症性の病態であった。基礎疾患は79例が有し、常用薬は75例であり、そのうち骨吸収抑制薬を使用していたのは3例であった。抜歯方法は通常局所麻酔に加え外来通院での静脈内鎮静法と入院管理下での静脈内鎮静法および全身麻酔で行っていた。抜歯後1例に顎骨壊死を認めたが、術後合併症は1例もなかった。必要に応じて静脈内鎮静法や全身麻酔そして入院管理を適応することにより、安全かつ確実な抜歯を行い、高齢者に安心して抜歯をしてもらえるように配慮していた。(COI開示：なし) (東京都立豊島病院 倫理委員会承認番号 倫臨迅6-81)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 血 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-069] 居宅介護支援事業所における口腔・栄養スクリーニング加算の活用状況に関する調査**

○本川 佳子<sup>1</sup>、白部 麻樹<sup>1</sup>、五味 達之祐<sup>1</sup>、岩崎 正則<sup>2</sup>、早川 美知<sup>1</sup>、渡邊 裕<sup>2</sup>、平野 浩彦<sup>1</sup> (1. 東京都健康長寿医療センター研究所自立促進と精神保健研究チーム、2. 北海道大学大学院歯学研究院)

【目的】令和3年度に新設された「口腔・栄養スクリーニング加算」は、通所系サービスの介護スタッフがスクリーニングを行い、それを介護支援専門員に共有することで、利用者の口腔機能向上や栄養改善を促進することを目的としている。本研究では、介護支援専門員が口腔・栄養スクリーニングに関する情報を受け取った後の実際の活用状況や課題を調査し、口腔・栄養サービスの質向上に資する方策の基礎資料を得ることを目的とした。

【方法】本研究は2023年に実施した郵送調査であり、対象事業所にはアンケート調査票を送付し、返送によって回収した。調査対象は、名簿を基に無作為に抽出した全国の居宅介護支援事業所1000件とした。調査内容は、口腔・栄養スクリーニング加算の活用状況（令和5年2月～7月実施分）、歯科・栄養の専門職との連携状況、ケアプラン作成時の課題等とした。調査の実施にあたり、東京都健康長寿医療センター研究所研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：R21-25）。

【結果と考察】有効数963件に対し、回収率は35.9%（346件）であった。通所施設から利用者の口腔・栄養スクリーニング加算の書面を受け取った経験については、「はい」が57.8%であった。また、書面を受け取った平均件数は $5.1 \pm 8.2$ 件であり、書面をきっかけにつながったサービスについては「つながった事例はない」が50.5%と最も多く、次いで「通所施設での口腔機能向上加算」が29.6%であった。これらの結果から、口腔・栄養スクリーニング加算に関する情報を介護支援専門員が受け取った後に十分な口腔・栄養ケアにはつながっていない可能性が示された。一方で、ケアプラン作成時には「栄養に関する課題が挙がる」が92.8%、「歯・口腔機能の課題が挙がる」が90.5%と高い割合を示した。本調査より、通所事業所のみならず介護支援専門員への口腔・栄養スクリーニングの普及・啓発の必要性が示唆され、また歯科、栄養、介護支援専門員の連携強化が重要であると考えられた。

（COI 開示：なし）

（東京都健康長寿医療センター研究倫理委員会承認番号 R21-25）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50～13:20 血 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-071] 「一歩踏み出せる！！歯科訪問診療ガイドブック」作成と今後の課題**○岡田 尚則<sup>1</sup>、和田 智仁<sup>1</sup>、大河 貴久<sup>1</sup>、水野 昭彦<sup>1</sup>、奥野 博喜<sup>1</sup> (1. 京都府歯科医師会)

【目的】超高齢社会に伴い、通院困難な要介護高齢者や医療的ケア児への口腔健康管理や摂食嚥下リハビリテーションを含めた歯科的対応が地域で求められている現状に対応するうえで、歯科訪問診療を行う歯科医師の育成が大きな課題となっている。本会において在宅歯科医療における様々な人材育成事業を行ってきたが、そのなかでも歯科訪問診療を行っていない歯科医師に対する支援が重要であることから、このたび、京都府歯科医師会地域保健部では、「一歩踏み出せる！！歯科訪問診療ガイドブック」の作成を行い、これから歯科訪問診療に取り組むことを考えている歯科医師にも理解しやすいように、器具の準備、処置内容、保険請求、多職種連携まで幅広く解説したイラスト付きのガイドブックを作成した。今後のより良い事業展開のために、歯科訪問診療への見解について歯科医師を対象とした意識調査を行った。【方法】歯科訪問診療ガイドブックの配布を行い、無記名アンケートにご協力いただいた本会会員の歯科医師に対して意識調査を行った。【結果および考察】歯科訪問診療を導入する際に難しいと感じている項目として、医療・介護保険診療報酬請求に関することや事務作業が難しいと感じているが多数認められ、今後は事例を交えた資料の作成も必要と思われた。また、偶発症の対応が難しいと感じているも多数認められたことから、高齢者や医療的ケア児の心身の特性の項目に加えて、歯科治療時に起こり得る偶発症への対応についても、わかりやすく図表を追加したガイドブックの作成が求められていることも明確になり、今後、歯科訪問診療の啓発活動を円滑に行ううえで、従来の歯科対応にプラスした内容の実践的な資料作成の必要性を感じた。また、口腔機能低下症や摂食嚥下リハビリテーションについての情報提供をわかりやすく発信していくことも課題であり、歯科訪問診療に携わる人材育成を長期的に行う環境作りを構築していく必要があることが示唆された。（COI開示なし）（倫理審査対象外）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

歯 2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 歯 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-073] 歯科に関する講義を受講した高齢者のフッ化物配合歯磨剤の使用状況に関する調査**

○遠藤 眞美<sup>1</sup>、朝田 和夫<sup>2</sup>、呉 明憲<sup>2</sup>、野本 たかと<sup>1</sup> (1. 日本大学松戸歯学部障害者歯科学講座、2. あさだ歯科口腔クリニック(東京都) )

**【目的】**

2023年元旦に日本口腔衛生学会，日本小児歯科学会，日本歯科保存学会，日本老年歯科医学会による「4学会合同う蝕予防のためのフッ化物配合歯磨剤の推奨される利用方法」が公開され，その後，多くの国民に普及にむけて4月に普及版が改めて発表された。普及版は厚生労働省医政局歯科保健歯科口腔保健推進室から，各都道府県，保健所設置市，特別区の歯科口腔保健担当局に向けてそれらの内容の情報提供がなされている。令和4年度歯科疾患実態調査によると52%の国民がフッ化物配合歯磨剤を使用しているとされているが，高齢者の使用状況は不明である。昨年，歯科診療所受診高齢者の歯磨剤の使用状況を調査したところ，約9割が歯磨き剤を使用していたが推奨量使用者は約4割だった。また，歯の残存にフッ化物配合歯磨剤使用が寄与している可能性が推察され。そこで，今回は生涯学習で歯科に関する講義を受講した高齢者の集団に対して同様の調査を行ったので報告する。【方法】

対象は，2024年に柏シルバー大学院で歯科に関する講義に参加した高齢者とした。方法は自記式質問紙調査とし，調査項目は年齢，性別，歯科の定期受診の有無，歯の欠損および補綴物の有無，1日の歯みがき回数，歯磨剤の使用状況と種類，歯磨剤使用時のフッ化物濃度および使用量などとした。

**【結果と考察】**

男性23人（平均77.6歳），女性37人（75.6歳）から回答を得た。定期歯科受診者は51人，自歯のみが24人，よくかめるが54人，食事は全員が普通食であった。1日の歯みがき回数は，3回以上が29人，2回が21人，1回が10人であった。歯みがき剤未使用が2人，練り歯みがき57人，ジェル状2人，液状4人であった。歯磨剤使用者59人のうち，高濃度フッ素配合を選択6人，濃度は不明だがフッ素入りを選択21人，フッ素入りかどうかは気にしていない25人，フッ素無配合を選択2人であった。現在の使用量は，1～2mmが1人，5mm程度が37人，1.5cm以上が20人であったが，講義後に使用希望量は順に1人，11人，35人となった。歯磨剤の使用割合は高かったものの，定期的な歯科受診をしているにも関わらずフッ素濃度や量について意識せずに使用していた。講義後には，推奨量使用を希望する割合が33%から57%に増加した。超高齢社会の多歯時代を迎えているわが国にとっては根面う蝕を含むう蝕予防は重要な課題といえ，そのためには様々な場で正しいフッ化物配合歯磨き剤の使用法の啓発が重要と考えられた。

（COI開示：なし）

（日本大学松戸歯学部倫理審査委員会EC15-011）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 歯 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-075] 介護老人保健施設に口腔ケア介入によって生じたスタッフの口腔衛生意識の変化**○西澤 光弘<sup>1,2</sup> (1. 医療法人群栄会田中病院 歯科、2. 医療法人隆仁会 山王歯科)**【目的】**

超高齢者社会に向け介護老人保健施設や老人ホームなどの需要が高まり入居待ちも散見されるようになった。しかしそれに反して老人施設のスタッフの離職率は高く深刻な人手不足で労働環境は決して良いとは言えない。そのためスタッフはそのような環境でも利用者の口腔衛生管理やQOLの向上に寄与している。当歯科は利用者数約100名が入居する当院介護老人保健施設（認知症専門棟、一般棟、ユニット型）（以降、老健とする）に口腔ケアの介入を行い、老健スタッフにその効果や歯科に対する要望などを調査し課題を検討したので報告する

**【方法】**

老健より歯科に口腔ケアでの介入を依頼され、月に2回入居者全員の口腔ケアをおこなった。その約1年後に老健スタッフ自身の意識変化や入所者の行動の変化、日常的口腔ケアでの困難事項などの調査を行い、回答の得られた43名の結果を分析した。

**【結果と考察】**

回答者の資格は看護師14名、介護福祉士22名、その他7名（理学療法士、言語聴覚士、生活相談員など）であった。歯科の介入によりスタッフ自身の意識の変化は、「少しは変わった」が最も多く67.4%であった。スタッフから見た入所者の意識や行動の変化は、「全く変わらない」と「一部の方に見られた」が多くそれぞれ51.2%、41.9%となった。現状の口腔ケア（歯科の月2回の介入とスタッフによる日常的口腔ケア）で良いかとの質問には「良いとは思わない」がやや多く55.8%であったが、「（現状で）良いと思う」が予想以上に多かったことに驚いた。日常的口腔ケアで困難な事象を問う質問では、「拒否する方の口腔ケア」が突出して多く日常の口腔ケアの困難さが想像された。次いで「口臭の除去、予防」「全身状態の悪い方の口腔ケア」「口腔内の状態の悪い方の口腔ケア」などとなった。現状で良いとは思わない方が今後どのようにするのが良いかとの質問では、「歯科に大いに介入してもらう」「歯科に相談する体制を確立する」が多い結果となった。今回の調査の結果からより効果的な口腔ケアを提供するためには利用者の口腔内や全身状態に合わせた対応が必要であり、そのためには歯科と老健スタッフの密な連携と老健スタッフ自身や利用者への口腔衛生に対する意識の向上が必要であると考えている。

(COI 開示：なし)

(医療法人群栄会田中病院 倫理委員会承認番号20241201)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 血 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査**

## [P-077] 「【OF-5 準拠】オーラルフレイルチェック」の開発（第1報）

○新家 信行<sup>1</sup>、齊藤 朋愛<sup>1</sup>、畑 陽子<sup>1</sup>、城戸 雅和<sup>1</sup> (1. 福井県坂井地区歯科医師会)**【目的】**

今回我々は、OF-5を多面的補完する「【OF-5準拠】オーラルフレイルチェック」（以下、OF-5準拠チェック）を開発した。OF-5準拠チェックは、質問項目をOF-5の質問5項目に加えて20項目とし、各質問項目が包含するオーラルフレイル（以下、OF）起因要素数からスコア化して解析する。OFの有無、重症度、発現率、予防改善目標を表示し、疾患としての口腔機能低下症の可能性も呈示する仕様である。本報告では歯科医院受診者においてその有効性、およびOF-5との整合性を明らかにする。

**【方法】**

福井県坂井地区歯科医師会員の診療所を受診した高齢患者568人（男性209人、女性359人、平均年齢70.2±9.6歳）を対象としてOF-5準拠チェックを実施した。OF発現の起因要素として嚥下、口腔筋、咀嚼、滑舌、唾液腺、口腔清掃、食事、疾患、交流・意欲の9項目を設定した。20の質問ごとにどの起因要素（複数）が関与するかを算出し、合計から百分率を求めOF発現率（以下、発現率）とした。同様に、口腔機能低下症の検査項目に準じた7つの評価項目を設定し、各質問から示される低下項目を抽出・計算する。この低下項目数と発現率から被験者を非該当、非該当(リスク有)、該当(軽度)、該当(中程度)、該当(重度)の5群に分けてOFの該当率を評価した（カイ二乗検定）。残存歯数低下に関する質問は被検者の誤認による過誤が生じやすく、事後に口腔内審査結果と照合し正答率を算出し検討した。

**【結果と考察】**

OFの該当率はOF-5とOF-5準拠チェックの該当者数について有意差は見られず、年代分布、男女間差異も同様で、両評価には基本的な差異が無いものと考えられた。1つ以上の質問にチェックをいれた非該当者では、OF-5準拠版が有意（ $P < 0.01$ ）に多く、早期のOF徴候把握に有効と思われた。口腔機能低下症の可能性が指摘された者は10%未満と少ないが、発現率と低下項目数に有意な相関（ $R^2 = 0.7$ ）が見られることから、発現率が口腔機能低下症の指標となる可能性が考えられた。また、残存歯数の正答率は80%前後であったが、OF-5準拠チェックで過誤修正を行い比較すると該当率に有意な差は見られず、過誤回答の影響は少ないと思われた。

（COI 開示：なし）

（坂井地区歯科医師会 倫理審査委員会承認番号 2024-1）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

■ 2025年6月28日(土) 12:50～13:20 ■ ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-079] 骨修飾薬投薬患者における抜歯後治癒経過の調査**

○秀島 樹<sup>1,2</sup>、福島 あかり<sup>1</sup>、磯部 昌幸<sup>1</sup>、有川 風雅<sup>1</sup>、中村 ゆり子<sup>1</sup>、片倉 朗<sup>2</sup>、潮田 高志<sup>1</sup> (1. 東京都立多摩北部医療センター歯科口腔外科、2. 東京歯科大学口腔病態外科学講座)

【目的】ビスフォスフォネート(bisphosphonate:BP)製剤やデノスマブ(denosumab:Dmab)製剤などの骨修飾薬投薬患者に発症する薬剤関連顎骨壊死(medication-related osteonecrosis of the jaw : 以下MRONJ)について研究が進められている。2023年7月には日本口腔外科学会よりポジションペーパー(以下PP)が提示され、術前後の骨修飾薬の休薬について、原則として骨修飾薬を継続下での抜歯を提案している。顎骨の感染、炎症はMRONJ発症の一因であり、抜歯処置は顕在化の契機と考えられている。現状MRONJの発症機序や有効な治療法は確立されておらず、その発症、予防に関する知見は重要であると言える。今回われわれは、抜歯前のMRONJリスクの評価、骨修飾薬の休薬/継続の判断に対する知見を得ることを目的とし、当科で実施した骨修飾薬投薬患者の抜歯症例の予後について後ろ向きに調査、検討を行ったので報告する。【方法】対象は、2023年4月～2024年12月に当科で抜歯術を施行した患者のうち骨修飾薬投薬の既往がある患者について後ろ向き調査を行った。年齢、性別、骨修飾薬投薬の原疾患、骨修飾薬の種類、使用期間、休薬の有無と休薬期間、術前後の抗菌薬投与の有無、抜歯部位、抜歯窩の治癒経過、リスク因子として糖尿病、ステロイドの使用歴、免疫抑制剤の内服歴、化学療法の有無を調査した。統計解析にはEZRを用いた。【結果】症例数133例、平均年齢77.5歳、男女比は1：10であった。骨修飾薬としてはBP製剤が86例、Dmab製剤が37例、その他が10例であり、骨修飾薬投薬の原疾患は骨粗鬆症109例、関節リウマチ8例、自己免疫疾患6例、悪性腫瘍10例であった。治癒不全を認めた症例はいずれもXP上で抜歯対象部の感染や炎症の所見が認められた。リスク因子を有する症例は40例であり、これらに治癒不全を認めた6例がすべて含まれた。術前後の休薬について薬剤別では低用量BP製剤72% (42/58例)、低用量Dmab製剤55%(10/18例)であった。高容量BP、Dmab製剤は3例すべて休薬していたが、治癒不全を認めた。【考察】2023年に新たなポジションペーパーが提示された。今回の調査では、低用量BP製剤においては休薬/継続に有意差はなく、PPで示されている内容を裏打ちする結果となった。その他項目においてもPPに準じた結果となった。今後もガイドライン作成の一助となる様、多くの症例を精査する必要があると考える。

(COI 開示：なし)

(倫理審査対象外)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：実態調査

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 歯 ポスター発表7（幕張メッセ展示ホール8）

**実態調査****[P-081] 高齢者に対するオンライン診療、医療MaaSの歯科運用の取り組みー  
Toba Online Dental Check-up Project on MaaSー（第1報）**○寺本 祐二<sup>1</sup>、小泉 圭吾<sup>2</sup> (1. 寺本歯科医院、2. 神島診療所)

【目的】過疎地域における医療の充実は喫緊の課題であるが、特に高齢者では病院や診療所への移動が大きな課題となっている。この問題解決に向けて、オンライン診療とオンライン服薬指導を行えるオンライン診療室の設置や、オンライン診療と移送を提供できる医療MaaS（Mobility as a Service）の導入が医療DX（Digital Transformation）として行われている。そこで今回我々は、高齢者に対するオンライン診療、医療MaaSの歯科運用について実現に向けて取り組みを行ったのでその概要を報告する。【方法】厚生労働省策定の歯科におけるオンライン診療の適切な実施に関する指針に準じて立案し、鳥羽市が行っている歯周歯科検診事業（地域歯周疾患指数）をオンラインで、さらに医療MaaSを使用して施行可能かどうかのドライランを施行した。従来の歯科医院来院型歯周歯科検診事業で参加している5か所の歯科医院に参加協力が得られた。同一医院の歯科医師ならびに歯科衛生士のペアで、歯科衛生士がMaaSに同乗して車内で歯周検査を行い歯科医師は自院にてオンラインによる歯科検診が可能か検証した。ドライラン終了後、参加した歯科医師、歯科衛生士にそれぞれにアンケート調査を実施した。【結果と考察】鳥羽市（人口16,432人）は有床の市民病院と保健所がなく、行政歯科医師や行政歯科衛生士もいない。無歯科医地区もあり、医療資源が乏しい地域での充実した地域包括ケアシステムが求められている。現在、全国で21か所の自治体で運用されている医療MaaSを鳥羽市ではさらに医科歯科連携として、また官民連携として歯科運用「Toba Online Dental Check-up Project on MaaS」を計画した。医療MaaSについて歯科運用をしている地域は我々が渉猟しえた範囲では報告がない。今回はあくまでも鳥羽市独自の歯科検診としてのドライランであり法定歯科検診として実施するには歯科医師が実施するとの明記がされている。今後の実施課題として、県保健所への届け出手続きならびに法定歯科検診ではない自治体独自の歯科検診として検討していく必要がある。事業化すれば将来的には現在検討が進められている国民皆歯科健診のひとつのモデルケースになると推察している。さらにオンラインによる歯周歯科検診が可能となれば口腔機能低下症に対するオーラルフレイルの検診事業にも繋がる。今回我々は過疎地域における医療資源が乏しくICTの活用で問題解決が可能か、その概要とドライランを臨床研究として報告する。（COI開示：なし）（倫理審査対象外）